

反動主義者としてのイエイツ

ジョン・R・ハリソン／加藤英治訳

I

イエイツの詩的發展はスタイルの探求だったとしばしば記述される。すなわち、この探求を通して、イエイツは若き日のラファエル前派的薄明から、老年期の「意志の内部の、鋼鉄のような硬さをもつ冷たいもの、熱情的かつ冷静なものへの感覚」へ移行したのである。オリビア・シェイクスピアへの手紙の中でホワイトヘッドのスタイルについての、「必要にして十分なことだけの表現、気難しく、嘲笑的な明晰さ」というイエイツの記述は、彼の後期の詩に十分当てはまるものである。しかし、彼の探求はスタイルだけでなく、主題にたいしても向けられていた。彼の青春時代や大人になりかけのころについて書かれたものを読むと、単語の綴りさえおぼつかないときにすでに詩人になることを確信していたという印象を受ける。もちろん、『自伝』の中で幼年時代を振り返っているのは功なり名とげた詩人であり、彼の追憶は疑いなく後の経験によって影響を受けているだろう。初期の詩の主題として、彼は過去、英雄譚、クフーリン、ディアミッドなどによって特徴づけられるアイルランドを選んだ。これはアイルランドの人びとも意味をもつようになったとはいえ、個人的神話を創造する試みだった。また、それは書く素材、すなわち、練習のための枠組を手に入れる試みという一面もあった。過去のこれらの英雄たちは、詩作法の実践という点ではイエイツにとっておそらく多少の意味はあっただろう。しかし、

二〇世紀のイギリス詩人が象徴としてランスロットやグウイネビアを用いようとしても、まず間違いなくほとんど成功しなかっただろう。

イエイツもそうだった。彼はこれらの象徴を導入することによって自分の詩の力を強めたいと思った。しかし、実際は強めるどころではなかった。これは非アイルランド人の読者がこれらの象徴を含む伝説を知っている見込みがないからだろう。もちろん、そのような読者でもこれらの伝説について知ることはできる。しかし、たとえ知識があったとしても、読者はそれらをおそらくそれほど重要なものとは見なさないだろう。それらが普通のアイルランド人にとっても大きな意味をもつかは疑わしい。

ジョンソンやダウソンをメンバーとするサークルに夢中になったイエイツは、マントとひらひらした蝶ネクタイを着用して歩き回り、その服装にふさわしい美の哲学を信奉していた。彼は彼自身が「レトリック」と呼ぶもの、グレアム・ハウの言葉を借りれば、「あらゆる種類のプロパガンダを含むように拡張され、社会科学や自然科学と関連したすべて、一般的にいえば、詩における『不純物』を指すように思える」ものの敵だった。一八八七年に、学校時代の友人だったフレデリック・グレッグに宛てた手紙の中で、イエイツは、「いかなるものといえども、美しくないものは文学においては存在する権利がない」といつている。このことによって彼がいおうとしているは表現のしかたの美しさであり、たんなる絵画的な美しさでは

ない。なぜなら、彼はユゴーがせむしに与えている美しさに言及しているからである。しかし、彼は、たとえどんな表現のしかたをされたとしても、政治学や社会学や自然科学などといった現世的なことがらが美しくなるとは認めないだろう。彼は芸術と生活、とりわけ、近代社会における生活が完全に対立するものであるとまさに死ぬまで強く感じていた。一九三五年に、彼は、「私はプロパガンダに囲まれて生き続けてきた。私が書く詩からはプロパガンダを排除してきたが、私もずっとプロパガンダをしてきた。私の心がそうであるように、あなたの心もプロパガンダによって憎悪を掻き立てられ、不愉快な気分になせられることだろう」と書いた（もちろん、これは正しくない）。同じ手紙の中で、彼は、なぜ詩人が自分の生活のなかへのプロパガンダの侵入を許すべきでないか、より説得力あるその理由を示唆した。それは、「ゲーテは私たちは断念しなければならぬといった。そして、私はプロパガンダは―若いときにこれに気づいていればよかったのだが―芸術家がそのようにして断念するものの一つだと思う」というものである。彼は中年期を若いときと見なしている。

イエイツはこの問題をめぐってアイルランドの若い詩人たちから批判された。彼らはイエイツが同時代の世界、とりわけ、第一次世界大戦に倫理的重要性を有する主題を見出さないことを非難した。しかし、「群集の指導者」は一義的に解釈したいアイルランドの主題に基づいて書かれた詩であるが、その主題は戦時下のヨーロッパにも当てはまるものである。イエイツは特定の現代的問題への言及を避けようとしている。しかし、彼の詩の多くは起こったばかりのできごとにはまる普遍的真理であり、このような照らし合わせの下に解釈されなければ、それらの意味が判明しないことがしばしばである。実際、彼の詩の中には将来を予言するものがあった。アイルランドにおける特定のできごとについて書かれながらも、「群集

の指導者」はそれをはるかに超えて現代の大衆運動や大衆宣伝に当てはまる。

群衆さえ集まれば、後はどうなろうと彼らは気にしない。

イエイツは社会的問題について意見をいうことに乗り気でないように一見見えるが、彼はナラヤナ・メノンの呼びかたを借りれば、「ヨーロッパの社会組織の欠陥や私たちの苦闘の本質についての異常なほど鋭い知覚」をもっている。

一九二二年に出版された『帳の震え』のなかで、イエイツは一八九〇年代の芸術運動との関わりについて、「いかなる公共的利害とも関わりのない、私たちの感動へのこだわりは神経の高ぶった、落着きのない男たちを連帯させた」といつている。すなわち、詩人は極度に個性的で主体的な立場の代弁者でなければならぬのである。このような詩人のありかたが象徴と引喩の錯綜した体系と結びつくとき、その結果は当惑させるものとなるだろう。イエイツはまた思想体系をも求めていた。彼はモード・ゴンやエズラ・パウンドは彼らの政治的プログラムへの信念によって誤った方向へ導かれていると思った。彼には革新的な哲学者や経済学者によって与えられるあまりにも安易な解答を受け入れることがまったくできなかった。しかしながら、イエイツはしばらくのあいだ社会主義に惹かれていた。彼が社会主義者になったのはウィリアム・モリスの影響による。彼は一八八七年の夏にモリスの社会主義的な詩を読んでいた（モリスの『社会主義者のための歌』は一八八五年に出版された）。一八九一年の六月に彼は『ナショナル・オブザーバー』に批評を書かなければいけなくなった。しかし、この『ウルトラ保守系の新聞』のために批評を書くことはほとんど不可能だっ

た。彼は自分が保守主義者であれば、あるいは、身をもち崩して、政治的共鳴によって文学的共鳴を損なわせない保守主義者のように書くことができれば、批評を書くことは簡単だろうといった。しかし、彼には二・三行の但し書きを書き込むことができなかった。それらを書き込んでいたなら、編集者は彼の批評を受け入れていただろうが。また、彼は『自伝』の中で、急激な改革によって世界を正すという考えやその計画をほんのわずかずつ捨てていったといっている。一九一九年に彼はかつて社会主義に思想体系を求めようとしたことを次のように振り返った。

私たちは思想をつなぎあわせて哲学を作り、

世界を統一したいと願った。

穴のなかで争っているいたちにすぎない私たちのくせに。

アイルランド独立戦争もまたこのような大義に基づいていると彼はいいたいのだ。しかし、そのようなユートピア的夢想は何も生み出しはしないのである。

ああ、私たちは癒そうと夢見た、

人間を苦しめているように思えるすべての悲惨を。

しかし、今や冬の風が吹き荒れて、

夢見たときの私たちが狂っていたことを知る。

イエイツに社会主義に惹かれていた時期があったというのは不思議なことである。彼に大衆の幸福への特別な関心があったようにはとうてい思えないし、社会主義者ならもっていると期待される凡庸な人間への共感をもつ

ていなかったことは確実である。彼に人間的共感が欠けていたこと、すなわち、彼の冷淡で超俗的な態度については、彼を知る多くの人びとの証言がある。マンク・ギボンには、彼には、「どこことなく冷淡な雰囲気、非人間的な態度」があると考えた。彼の意図的な詩人的演技を考慮し、それを取り除いたとしても、「彼という人間の底には真正の尊大さが沈殿した。彼は平凡な人間、卑小な輩を嫌悪し、軽蔑した。なぜなら、そのような人びとの生活は彼には陳腐で屈從的に思えたからだ」(ギボンはあるアンソロジーからイエイツに外されたことがあった。しかし、たとえそうだったとしても、このような性格は社会主義に惹かれた人間に期待されるようなものではない。彼はおそらく貧しい人びとへの同情より、重大な変化の生起を促すという思想に惹かれたのだろう。彼は世紀の変わり目に自分と仲間たちは世界の精神的運命を変えるような一冊の本を作ることになるだろうと考えた。そして、およそ四〇年後に『幻想録』がその本であるといった。多くの感受性の鋭い人びとが若いときに社会主義的な思想や理念に惹かれる。しかし、このような人びとのなかで、後期のイエイツほど他の方向へ遠くまでいってしまったものはほとんどいない。

II

四〇歳以降、イエイツは彼の詩に公共的な利害に関わる主題を導入し続けた。思想体系を求めて、メノンのいいかたを借りれば、「彼はプロテスタンティズムとマルクスの弁証法を除くすべてを試みた」――プロテスタンティズムとマルクスの弁証法を例外としたのは、前者は非アイルランド的だからであり、後者は科学的、機械論的で、想像力の否定の立場に立つからである。妻の自動筆記を元に自分の体系の構築に取り掛かったとき、彼の詩人としての生涯の最高の充実期が始まった。しかし、彼の詩作法を再

活性化したのはそのような体系自体ではなかった。体系の意義は知的関心の中心を提供して、彼の想像力を解き放ち、知的活性化をもたらしたことがあった。彼はもはや詩に不適だとして世事を軽蔑する必要はなかった。彼はいかにも「詩的な」あざとい書きかたで、一九世紀の「ロマン派的な」詩のいくぶん血の気の足りないイミテーションを作る代わりに、自分にとつてもっとも自然な口調で自分が感じていることをいい始めた。彼が彼のもっとも個性的な作品、すなわち、彼の最良の詩を書いたのは、彼がついに一九世紀後期の、孤独で繊細な、言葉やしぐさを花咲かせながら、自らは萎れていく存在としての詩人という美意識を退けてからのことである。私はイエイツが公的生活や公的活動と私的（芸術的、すなわち、観想的）生活や詩が完全に対立すると信じていたと述べた。詩集に再録された『役者女王』からの歌の中で、彼は次のように歌っている。

詩人なんてまっぴらだ、

頭のなかは空っぽで、

美しい女のために詩を作ることばかり考えている、

独り寝のベッドの中で。

これはイエイツ自身のことであり、恋愛について書くのではなくて、恋愛そのものをしたいのだという願望もいくぶんかは込められている。この詩は一九三五年に出版された『三月の満月』に含まれており、初期の詩への不満を暗示している。しかし、中年期以降のイエイツは実践家だった。彼は文学者の団体を組織し、アベイ座の旗揚げを助け、アイルランド自由国の上院議員になった。実際、彼は公務においてきわめて有能だった。彼は職務を真剣に遂行した。後に彼は幻滅し、公的生活から退いたが、彼の最

良の作品のいくつか―焦燥、不遜、嘲笑の詩―が生み出されたのは公務の経験からだった。

国事に現実的に巻き込まれるようになるまでは、彼は政治には無関心だった。彼は幻想の探求者にとっては政治は半端仕事にすぎないと思った。イエイツにとつてリアリティーを形作るのは、政治や時事的なことがらではなく、芸術創造に息づく想像力だった。ほかのすべては流動的で卑小なものにすぎないのである。政治家たちに何をすべきかを説くことは危機の時代における詩人の任務ではないのである。

こんなご時勢じゃ、

俺たち詩人は黙っているほうがいい。

なぜって、俺たちにや政治家をまっとうにはできないからさ。

これは一九一五年に書かれたが、第一次世界大戦、あるいは、起きることがほとんど確実視され続けていたアイルランドの反乱を主題としている。そして、彼が「とんでもない茶番」として無視した戦争について、この七行の詩しか彼は書かなかつたし、書く気もなかった。現実政治は彼にとつて、「新聞社へ通じる階段の隅に落ちている汚れたオレンジの皮」⁷だった。

一九二二年にイエイツはアイルランド自由国の上院議員になり、現実主義の政治家たちとの関係はより直接的なものになった。論戦において彼は目立った活躍はしなかった。「多少心得のある」ことがらを除けば、大部分の政治的問題について沈黙を守った。しかしながら、彼はたつた一度だけプロテストアントの良心的離婚について、その容認を熱烈に擁護した。上院での職務やアベイ座での上演をめぐる官僚との争いのせいで、政治や政治家にたいする彼の焦燥は強まった。一九三六年のドロシー・ウェルズリー

宛ての手紙の中で、彼は、「あなたは私たちは憎しみをもってはいけないという。あなたのいう通りですが、怒りをもち、それを口に出すことは許されるし、ときにはそうしなければならぬこともあります。憎しみは『受動的な苦しみ』ですが、怒りは喜びの一種なのです」と書いた。彼の後期の詩はこのような怒り―老年やかつての気高く英雄的な時代の消滅や現代文明の諸悪やアイルランドの人びとが耐えなければならなかった苦しみにたいする―の真情あふれる表現である。次の格調高い文章は引用したばかりの手紙からのものであるが、これはいかなる批評にも増して、後期の詩の精神を明らかにしている。

私はそれらの民謡〔ケイスメントをめぐる民謡〕のなかで私の生涯にわたる戦いの相手と戦っている。それは私たちアイルランド人にふさわしい戦いだ、特定の国とは無関係である。バーナード・ショーの戦いの相手も同じ相手である。密かなでつち上げが正義に付随していることを知りながら人が正義を話題にするとき、自分は精神的にふさわしくないと知っている人を大司教が聖餐式に参列させたがるとき、私たちは権力にたいする積年の戦いを想起する。そして、私たちの先祖のスウィフトが「もはや激しい怒りもその心臓を引き裂きえぬ」ところへいつてしまったことを想起する。そして、私たちは完全に正気を失ってしまう。

後期の彼の英雄はアイルランドの伝説上の人物たちではなく、スウィフトやバークやバークリーである。彼は冷徹な知性を賞揚する。ジョージ・ムアは若きイエイツについて、「彼は文学作品にしか関心がない」といったが、後期の詩を書いたイエイツについて、こういうことは正しくない。し

かしながら、もし詩の素材と見なさなかったなら、彼は社会的問題や哲学的問題についておそらくそれほど強い関心はもたなかっただろう。

一九三六年にはすでに彼は政治を完全に拒絶し、どのような組織形態の現代の国家にたいしても信頼を置くことはなくなっていた。彼は二度とふたたび、たとえアイルランドにおいてさえ、政治家になるつもりはないといった。彼は年を重ねるにつれて、実際、現実認識を深めていったが、彼の主張によれば、それとともに、国家の冷酷さや非情さへの恐れが強まってくるのだった。いかなる国家も等しく責めを負うべきであるというのが彼の確信だった。すなわち、「コミニズムであれ、ファシズムであれ、ナショナリズムであれ、聖職者主義であれ、反聖職者主義であれ、どのような組織形態の国家もそれらの犠牲者の数に応じてすべて責めを負うべきです。私は声を上げ続けました。私は自分ももっている唯一の伝達手段―詩―を用いました。手元に私の詩集があつたら、『再臨』という詩を見つけてください。一六六一年か一七年前ごろに書いた詩ですが、今現に起こっていることを予言しています」¹⁰。このような文章があるからには、イエイツの詩には政治的内容や社会的内容がまったく欠けているということは無駄である。この文章は彼が他のところで述べていることと矛盾してはいない。自分の詩にはプロパガンダを侵入させないと彼がいうとき、それは、どちらの側も完全には正しくないような、たんなる局所的な対立においては中立を守るということを意味している(真実には反しているが)。イエイツの詩は政治的大変動の原因よりむしろ結果を扱っている。彼がアイルランドのナショナリズムや反乱についてのきわめてすぐれた詩を書いたのはその理由による。

エセル・マニン宛ての一九三七年の手紙の中で、彼は政治的な事件をめぐる詩を書いていると明確に認めている。すなわち、「……私は現代の政治

を恐ろしいものだと思っている——私に見えるものは誤った情報によって煽られた集団的熱狂だけである——ケイスメントの事件がここ数週間の内に私の恐れをより深刻なものにした。そのことを主題とした私の民謡は成功を収めた。……私は今度の民謡でふたたびその主題に戻ることになるだろう。これらの私の民謡は際立って優れたものとはいえないが、あぶくのようにすぐ消えるものでもない」¹¹。「ロジャー・ケイスメント」という詩はケイスメントの汚名が晴らされるべきであるという申し立てであるが、それはまた現代政治のやり口への告発でもある。

彼は絞首刑に処せられた、
けれどそれはよくあること。

政治的な陰謀家たちはつねにこのような危険に身をさらしてきた。しかし、

大嘘つきが彼らのでっち上げを
ほんとうに見せかける用意を整えた。
彼らはでっち上げを世間に広めた。
それは今までになかったこと。

イエイツは虚言の広まりこそ現代の新たな悪であると暗示している。彼の社会や政治にたいする貴族主義的な姿勢が彼にこう考えさせているのである。国事における虚偽は最近始まった現象ではない。新しいのは情報の広がりによってより多くの人びとがこういった種類の事件を知るようになり、政府が自分たちの行為の正当性をより多くの人びとに納得させなければならなくなったことである。政治が王侯貴族たちに委ねられていたときには、

国事に直接関わる人びとだけが不安を取り除かれるか、だまされればよかった。あるいは、支配者たちは自分たちの行為をまったく説明しなくてもよかった。道義に反する政策でも、それが結局よい結果をもたらすか、ほかにやりかたがなさそうであれば十分に正当化された。良心の咎めはよい結果によってやわらげられ、発言は恐怖によって控えさせられた。イエイツは、こういったからといってどうにもなるものでもないのだが、もしそのような王侯貴族たちがふたたび支配するなら、ケイスメント事件のような卑しい事件は起こらないだろうという。全体としての国家がきれいさっぱり良心を片づけてしまわなければならないのなら、このような事件はそれほど起きそうもない。正当化の根拠というものはすくなくとももつと説得力をもたなければならぬだろう。イエイツにとって我慢できないのはこのような誤った正当化なのである。イエイツは、もし誰かが利益を脅かしているのなら、その人を殺害しなければならないこともあるということを知る。しかし、もしその人が自分の原則に基づいて行動しているのなら、その人をきちんと埋葬し、その人について嘘をついてはならないのである。

墮落した現代政治の虚言癖が「桂冠詩人のためのひな形」の主題である。かつて、

中国からペルーにいたる玉座に
ありとあらゆる種類の王たちが座り、
ありとあらゆる男たちや女たちが
彼らを偉大なる名王と呼んだ。
そんな名王なら構わない、
国事のために

たとえ彼らを愛する女たちを待たせても、
彼らを愛する女たちを待たしても。

「たくましい右腕ですべての人びとを震え上がらせるならず者の黒人や白人」でさえ「彼らを愛する女たちを待たせる」ことが許される。生まれや富によって支配者にもっともふさわしい人びとや、腕力によって支配者にもっともふさわしい人びとが選挙によって支配者に選ばれた人びとと対比される。

公人たちが現代の玉座に拍手を送るとき、

詩神は口を閉じる。

売買可能な歓呼、

愚か者たちが取り仕切っている公務や

封蝋や署名。

こんなもののためにまともな男が

自分を愛する女を待たせるだろうか。

これらは政治に強い関心を抱きながらも、完全に幻滅させられた人間の言葉である。それらは政治にまつわるすべての全面的な拒絶を暗示している。

政治家は脳天気、

丸暗記した嘘をいう。

ジャーナリストは嘘をでっち上げ

首を絞める。

だから家にいてビールを呑み

投票にいきいたい隣人たちにはいかせればいい。

〔古い石の十字架〕

ここにはふたたび政治と大衆的ジャーナリズムのつながりへの指摘がある（彼が政治を「新聞社へ通じる階段の隅に落ちている汚れたオレンジの皮」と記述したときに暗示されていたのはこれだった）。イエイツは三流雑誌の増加を大衆に迎合する民主主義の病弊のもう一つの徴候と見なした。民主政治にたいする彼の見かたは、もっとも判断能力に欠ける人びとによる、もっとも支配能力に欠ける人びとの選出と要約することができよう。

III

産業化され、科学化された民主主義的社会における生活に対立するものとして、彼は貴族的な生活様式を称賛した。これは彼の若き日には高潔で、冷たく品位ある美女の理想化という形で現れた。

そして、ああ、誇り高き娘よ、彼の漕ぐオールの音が海から聞こえてくるときの

おまえの美しさも、誇らしげに男達を尻目に夕暮れの小石だらけのの
海岸の網のそばを

ゆっくり歩いていたかつての娘たちの美しさにはかなわない。

あのころ私は心にひび割れをもたない少年だった。

イエイツは、貴族制は、卑小な村長や村民には不可能な洗練された豊かな生の理想を提示することによって、かつて想像力を育んだと信じた。彼らはそのような貴族的生によって、彼の後期の詩にはたつぷりと描かれる「食

べること、寝ること、金を稼ぐこと、子供を作ること」からなる卑小な世界から引き離された。彼はある手紙の中で、「そういうわけで、いずれにせよ私はおそらくあまりにも文学的な眼で歴史を読み、すべてを一種の演劇に変容させる。そこでは誇り高き人びとは金で作った服を着て歩き、彼らの熱い心を視覚化する。それを見て低級な観客たちは自分たちの魂がそれだけ高められるのを感じるのである」¹²と書いている。

『自伝』の中で、彼は「誇り高い、孤高のものを愛するというもっとも重要な信念」¹³について記している。彼の望みは、

ずっと昔に死んだ人びとのもっとも聡明な心に

神から送られる異言を聞くことだけを求め、

人間が知らない歌が歌えるようになることだけを求める。

（時の十字架にかけられたばらに）

ことである。イエイツはしばしば「すべての高貴な土壌」や「失われた伝統」への嘆きを提示し、「私の詩の内で、これらの言葉のくり返しでないものが、どれほどあるだろう？」と問う。彼は「良家の人びとの長期にわたって確立された生活」と芸術家の生活とのつながりを示唆しているのである。永続性がそれらに共通の要素である。なぜなら良家の人びとは永続する事物から生まれ、芸術家は永続する事物を生み出すからである。イエイツは詩人たちは「貴族制がウルビノやベルサイユにときおりつかのま生み出すことがある社会形態をいつも念頭に置いている」¹⁴と信じていた。カーライルやラスキンと同様、彼は過去の生活様式や社会を理想化した。彼らと同様、彼は中世社会の中に見出した芸術と生活の統一を称賛した。彼は、一世紀から一三世紀にかけては、神学者と詩人と彫刻家と建築家の統一が

あったという。彼は、ヨーロッパではおそらくアイルランドが最初にそれを追求するだろうと考えた。

彼は貴族と詩人を同一視したが、それは彼が両者とも威厳と品位をもつ優れた存在——前者は富と育ちによって、後者は感性と芸術への没頭によって——だと信じたからである。グレゴリー夫人に想像力あふれる作品を可能にさせたのは、彼女の家門の伝統——「半封建的なロックスバラ、先祖伝来の階級感覚、男女がどのような意見をもっているかではなく、どのような男らしさや魅力をもっているかによって評価される上層社会についての知識」¹⁵である。「貸し馬屋の息子という卑しい育ち」のキーツは育ちや家系という点ではグレゴリー夫人とは反対の位置にあったが、イエイツはこれら二人には多くの共通点があると信じた。「知性や作法や人格における魅力にせよ、あるいは文学的魅力にせよ、すべての魅力は受け継がれたものではないだろうか。偉大な貴婦人は優れた詩人に劣らず質素である。なぜなら両者とも古来より伝わる自分独自のもののみをもつからである……」¹⁶。イエイツが自分の思想に共感を寄せてくれるグレゴリー夫人のような人物の支援を受けられたことは幸運だった。グレゴリー夫人との共同作業の成功によって、イエイツはそのような関係が理想的なものだと結論づけた。彼は、貴族や支援システムの消滅によって、芸術の影響力や内在的価値が低下したと考えた。

恋人たちや踊り手たちは殺されて今や土くれ、

そしてのつばたちや剣客たちや騎手たちは

今いずこ。

彼らは消滅してしまったのだ。

そして俺たちや詩神たちは皆、無用のもの。

彼らには彼らの流儀の学校教育がある。

しかし彼は「彼らの流儀の学校教育をやり過ぐす」、そして、

剣客たちや貴婦人たちが今でも詩人との交遊を楽しみ、

詩に報酬を払い、バイオリンの音に耳を傾けることがある。

彼らはみな死んでいるのに、俺は今だに彼らの召し使いをしている。

（「クロムウエルの呪い」）

と信じたがつている。ルーイ・マクニースはこれらの貴族は語るに値する
ような文化はもっていない、彼らにあるのはせいぜい時代遅れの強がりや
腹黒い善意や馬の扱いにすぎないといっている。イエイツの想像力の
歪みの一例は、スポーツ界で成功したグレゴリー夫人の兄弟の一人を英雄
視したことである。

おそらくイエイツは、たとえ共同作業のための協力関係だったとしても、
貴族から支援を受けた最後の詩人だったろう。彼はこのように過去の貴族
が享受した、余暇に恵まれた洗練された社会を好んだので、ますます多く
の支援を求めるようになった。そしてそのような社会こそ芸術にとって
もっとも都合だと長いあいだ信じるにいたった。

私の住まいは……

毎日私の足音が

フェラーラの壁の緑陰を照らすところでもよかったのだ。

あるいは過去の幻たち――

揺るぎなく、高貴な幻たち――

のあいだを抜けて、夕暮れにまた朝にウルビノの急坂を登っていき、
公爵夫人と客たちが語り合った邸を訪ねられるところでもよかった
のだ。

（「民衆」）

『緑色の兜』に彼は貴族的伝統の見事な擁護を含めた。

今より幸福な世界がどうしてやってくるだろう、

情熱と厳密さが長いあいだ一体であったこの邸が、

あまりにも荒廃して、

見開いた目で太陽を凝視する人を生み出せなくなったとしたら。

（「土地騒動にゆすぶられた邸をめぐって」）

（イエイツが「情熱」と「厳密さ」という言葉を使って貴族的精神を記述
しているのは意味深い。イエイツの後期の詩の二つのもっとも印象的な特
質がそれらの情熱と厳密さだからである）。「驚の想念」や「見開いた目」
は民主主義の平等化運動によって破壊されてしまった。「第二のトロイはな
い」は貴族主義的個性を有する高貴な男女と平等主義の原理を対比してい
る。高貴な男女は、

高貴さのおかげで火のように単純で、

引き絞られた弓のように美しく、

こんな時代には不自然な種類の、

気高く、孤高の、ひどく厳格な心。

をもっていた。この詩の主題であるモード・ゴンは貴族の生まれではなかったが、生まれながらの貴婦人であり、指導者だった。イエイツはアイルランドのもっとも偉大な指導者の一人、パーネルは貴族的姿勢―力強さ、厳格さ、孤高さ―の典型だと考えた。彼は知的自由と社会的平等は両立不可能で、アイルランド人ほど、平等性を生まれながらに嫌っている民族はないと信じた。実際、アイルランド人は何らかの可視的な卓越性に基づく支配を尊重した。イエイツはおそらくオリアリから貴族主義的ナショナリズムを学んだ。彼は指導者としての権能は個人としての卓越性に基づくべきであり、安定や生の充足のためには秩序や権威や階級が必要だと信じた。

兵士は誇らしげに隊長に敬礼する、

信者は神にひざまずく、

サラブレッドの牝馬に賭けるものもいる、

トロイはヘレンに賭けた、トロイは死んだが愛慕した。

〔曲が同じ三つの歌〕

彼がここで暗示しているのは、トロイの滅亡の原因は立派な、英雄的なものだったということである。しかし今や、

国家の頂点が空っぽになり、

秩序が緩んで、内輪採めが激しくなったので、

私たちみんなで何かいい歌を見繕い、

町へ繰り出して、練り歩かなくちゃならないときだ。

偉大な指導者を欠くとき、国家は滅亡せざるをえない。

人類を統率する隊長はどこにいる。

内部が空洞になった木の運命はどうなる。

貴族や力強く厳格な指導者が消滅すると、国家は偉大さを失う。

偉大な国家は頂点に花を咲かせる。

ジョージ・オーウェルはイエイツの「思想傾向」はファシズム的であり、生涯を通して彼の視座は貴族主義の経路を通じてファシズムにいたる人びとの視座だったといった。私たちが見てきたように、彼は厳格な階級制度や、少数の人々への強大な権力の集中や、個人としての卓越性に基づく指導者への無条件的な服従の正当性を信じた。これはファシズムの理念にきわめて近い。ムッソリーニが権力を掌握した二年後の一九二四年に彼はこう書いた。「……きたるべき世代は自由の拡大ではなく、その過ちからの回復―権威の樹立、規律の復興、あへんによる夢の助けを必要としない十分に英雄的な生の発見―を自己の任務としなければならないだろう」¹⁷。

IV

伝統に忠実な過去へのイエイツの擁護は「一九三一年のクール荘園とバリリー」においてきわめて美しい表現が与えられている。詩の気分は冷静沈着な是認と断念である。詩の内容は彼を励まし続けたある友人と、彼を

守り、鼓舞し続けたある私有地へのパーソナルな贅辞である。

その湖のほとりに冬の日差しの下、

今やすっかり枯木と化した森がある、

そして私はその森のぶなの林の中に立った。

たとえ読者が出自や相続した財産という特権を不正なものだと考えたとしても、きつと次のような真率でパーソナルな感情の表出には動かされるに違いない。

私たちは最後のロマン派だった。つまり選んだ主題は、

伝えられてきた高潔さと美であり、

詩人たちが民族の書と名づけるものに書かれているすべてのことからあり、

人の心をもっとも清めることができ、

韻律をもっとも高揚させることができるものすべてだった。

けれどもすべてが変り、あの天馬には乗り手がいない、

かつてはホーマーがああ鞍に跨がり、

白鳥が陰りいく川の上を漂う辺りを走ったものだが。

この詩は一九三三年に発表されたが、その当時の大部分の詩の主題は「伝えられてきた高潔さと美」ではまったくなかった。一九三〇年代の共産主義を信奉する詩人たちは貴族や伝統的価値観の影響力の衰退を歓迎した。彼らは財産や特権や階級制度の破壊を求めた。しかし彼らの態度には深みや同情心が欠けていた。下層階級の文化、あるいは文化の欠如にたいする

彼らのどこことなく侮蔑的で浅薄な理解は、貴族の伝統的文化へのイエイツの信念に比べれば、生命を欠いたたんなる理論にすぎない。

理想的階級社会がどんなに好ましいものとしても、それは現代の諸条件との関連をもちえないという考えをイエイツは受け入れなかった。彼によれば、世代間の伝承の保証と、他の仕事からの精神の解放を可能にする財産が不可欠であるような修練を欠いた人びとが権力を掌握したためにアイルランドは活力を失ったのだった。彼は理想の指導者は自分の個人的要求の実現に心を砕く必要がなく、その結果、完全に公平無私な判断が可能で、収賄への誘惑からも自由でありうる紳士でなければならないと信じた。イエイツは敬意を払うべき国家の諸機関がなく、称賛すべき国家の偉業がなく、国民の心に理想が存在しなければ、国家という観念を生彩あるものに保つことは不可能だと考えた。若いアイルランドの詩人たちが、政治的社会的関心と直結する明確なイメージを大量に作ることによって、青年たちの心を単純な倫理的観念で満たそうとしたのは誤りだった。彼は自分もその一翼を担った運動を擁護したが、それはその運動がより永続性をもたらす方法で、すなわち、「神秘的自然観をもち、老齢とそれがもたらす衰弱の普遍的勝利と人間の孤独な魂による自然の究極的拒絶にたいする無限の悲しみを抱くアイルランド人の古い宗教」¹⁸を主題とすることで、同じことをなしとげようとする試みだったからである。

しかしながら、貴族制や財産への彼の称賛は、動機においてはそうでなくとも、すくなくとも気分においてはときにはいかがわしいものとなる。

「……人は曾祖父が土地を金品と交換した結果、あらゆる美しいものを愛好するようになった魅力的で人を楽しませる人物に出会う。その人物のそのような性質は曾祖父の交換がなかったら、得られなかったものだ。人は屋根裏部屋の窓から、その人物をほればれとした目で見る」¹⁹。こういって

いるのが、かつて桂冠詩人の任命は著名人を賞揚する必要とは切り離されなければならないと主張した人間であることを考えると、奇妙な印象を受ける。これは詩人たちが富者の支援に依存せざるをえなかった時代に書かれた献辞に劣らずひどいものだという印象を受ける。もしイエイツに屋根裏部屋ですごした経験がすこしでもあれば、こんなことはいわなかっただろう。イエイツは芸術のために自分の人生を犠牲にしたと考えていたようだが、ジョージ・ムアは彼のこのような考えをあざ笑った。イエイツは自分の詩から得た金は中年にいたるまでは年一〇〇ポンドを上回ることはけっしてなかったと主張した。しかし彼に飢餓の経験が皆無だったのは確実であり、また彼の詩は発表と同時に大評判だった。実際、彼の初期の詩は過分の注目と称賛を得たのだった。

V

ジョージ・ムアは中産階級がレインの絵画コレクションをアイルランドに残す努力を身銭を切ってしなかったというイエイツの批判に触れ、イエイツは「肩書」と自家用馬車を有する人びと」だけが絵画への鑑賞眼をもっている、中産階級は芸術のために何も貢献したことがない、という奇妙な考えをもっていると述べた。イエイツは自分自身は中産階級の出身ではないと考えた。そして彼が下層階級の出身でなかったことは確かだったので、自分は貴族階級に属していると考えた。この主張はかならずしも虚言ではない。ベンジャミン・イエイツと結婚したメアリー・バトラーはキルデア州トマスタウンの土地を相続し、それをイエイツ家にもたらしめた。この土地は詩人の時代にいたるまでイエイツ家のものであり続けた。バトラー家は、フィッツジェラルド家に次いで、もっともよく知られた中世のアンゲロ・アイリッシュ貴族だった。詩人の父のジョン・バトラー・イエイツは

キルデア州の六二六エーカーの広さを有する植民地を相続した。詩人の小父のロバート・コーベットはよく知られたカントリー・ハウスだったサンデイマウント・カースルを所有していた。そしてJ・B・イエイツはロンドンに住んでいるとき、子どもたちにコーベットやサンデイマウントのことをしばしば話してやった。ジョージ・ムアがいうように、イエイツが自分分はオーマンド公爵になり損ねてしまったと考えていたのは、いくぶんかはこのような理由による。にもかかわらず、そのような考えは性格上の欠点を暗示する気取りであり、この欠点はいかれの詩に反映している。オブライエンは多くの人がイエイツがファシズムに惹かれたことがあったということを認めたがらないのは、偉大な詩人や小説家は、政治領域においても、「ナイスガイ」にちがいないという信念のせいだと指摘した。しかしイエイツが多くの点で「ナイスガイ」ではなかったということを示す証拠がある。冷静さや孤高さや厳格さや近寄りがたさを有する貴族や偉大な指導者たちへの没頭から、彼は非情さを学んだ。ムアは「イエイツにおける人間的共感の欠如」²⁰を指摘した。ナラヤナ・メノンは、「決定論的な循環史観などの持論から一歩出れば、彼の人間的共感はいわめて限られている」²¹と考えている。彼は増大する暴力の時代における人間集団にはほとんど関心をもたなかった。

このことは彼の晩年にはとりわけ当てはまる。初期の作品、たとえば「一九一六年の復活祭」においては、彼は「日常性」のなかに埋没していたアイルランドの普通の人びとを救い出し、英雄的な身の丈を与えている。

私は日が暮れるころに

彼らがカウンターや机を後にして、

灰色の一八世紀の家いへのあいだから

生き生きとした顔で出てくるのを見たことがある。

彼は思い出す。

彼は見栄っ張りで酔っぱらいの田舎者だと思っていた。

彼は私の最愛の人々に

ひどい虐待を加えた。

だが彼の名前も私の歌のなかに含めよう。

彼もまたいき当たりばつたりの喜劇への

出演を取りやめた。

彼にも別の役が回ってきて、

すっかり変った。

恐ろしい美の誕生だ。

これらはイエイツが愛した国の自由を求めて戦ったアイルランド人である。たほう、イエイツの人類への最終評決は、「適者や強者や勇者だけが残るまで徹底的に戦わせればよい。そうなれば、そのような人びとは大衆の水準に無理矢理引きずりおろされることもなく、はるかに幸福に暮らせるだろう」というものだったようだ。イエイツは自らをアイルランドの大衆とはけっして重ねあわせず、大衆から迫害を受けたバーネルのような指導者や例外的な人びとと重ねあわせた。

外国人たちがエメットやフィッツジェラルドやトーンを殺害したとき、私たちは書き割り舞台の観客のような存在だった。その場が過ぎればもうどうでもよかった。

私たちの暮らしには関係がなかった。しかし大衆の狂気が、ヒステリーが、この獲物を引きずり倒したのだ。

私たちの罪を共有するものはいなかった。そして私たちは書き割り舞台の役者として

彼の心臓を食い荒らしたわけでもなかった。

〔バーネルの葬儀〕

彼は復活祭の反乱の失敗の責任はアイルランドの大衆が負わなければならないと信じるようになった。

アイルランドで歌われ、

語られたことはすべて嘘だった、

大衆という病原体から生まれた嘘だった。

嘘でないのは死に際に鼠が聞く歌だけだった。

彼自身の詩はこのような嘘には属していなかった。彼はまたデ・バレラやコズグレーブやオダッフィのような指導者たちを非難した。なぜなら彼らはバーネル的性質を欠いた、大衆迎合的な指導者たちだったからである。

嫌な奴ばかりがのさばり、

私が愛した男はあの世いき、

臆病者は座ったままで、

無礼者はとがめられず、

酔っぱらいから喝采を受けたならず者は

見逃される、

お調子者はもつとも卑しい連中目当てに
ジョークをいい、

利口者は道化のように叫んで、

人の気を惹こうとする、

賢者は打ち倒され、

偉大な芸術も打ち倒される。

〔釣り人〕

彼らとパーネルの違いは、

彼らは大衆を学校としたが、彼は孤高を師とした。

彼はジョナサン・スウィフトの暗い森を通り抜け、

血を濃くしてくれる苦い知恵をもぎ取った。

〔パーネルの葬儀〕

ことである。もしパーネルが生きていたなら、あるいはこれらの指導者たちが彼の精神をより多く受け継いでいたなら、復活祭の反乱の結果はイエイツの理想——一八世紀後半のグラタン議会——により近いものになっていただろう。

VI

多くの点で、イエイツはT・E・ヒュームの芸術思想を実現している。

すなわち両者ともに「論理的内容」を有する「貴族的精神」やヒュームが幾何学的芸術と呼ぶものに大きな喜びを見出している。イエイツの理想は

「夜明けのように／冷静かつ熱情的な……詩」だった。

いったん自然を後にしたからには、いかなる自然物からも

自分の肉体の形をけつして借りるべきではなく、

ギリシャの金細工師たちが金を打ち伸ばし、

金を焼きつけて作るような形を借りなければならない。

このような芸術においては、安定性や厳密さの中に永遠性が求められる。

ヒュームはこのような芸術は抽象化を目指すと考えた。いっぽう、イエイツはそれは生の諸相の完全な統一の表現だと信じた。「私は初期のビザンティウムにおいては、おそらく空前絶後のことだが、宗教的生活と審美的生活と実際の生活とが一つになっていたと思う」。すなわち芸術家は社会の内部で活動している諸力を我が物にし、それらを自分の意図に合わせて変形し、自分の芸術の主題として利用することができた。これこそイエイツ自身が試みようとしたことであるが、彼はそのような諸力や社会そのものの制御しがたい性質によって自分が妨げられていると考えた。「私はもし一ヶ月の古代生活が与えられ、そのあいだ好きなところにいるてもよいのなら、ユステイニアヌスが聖ソフィア大聖堂を建て、プラトンのアカデミアを閉鎖するすこし前のビザンティウムで過ごしたいと思う。そこには小さな酒屋があり、そこで私は哲学者のようなモザイク職人に会えるだろう。彼にはプロティノスをも凌ぐ濃さの超自然的存在の血が流れているので、私のあらゆる疑問に答えを与えてくれるだろう。なぜなら彼はその誇り高い繊細な技で、王侯たちや聖職者たちにとっては権力維持のための道具である大衆の忌まわしい狂気を、人間の完全な肉体のように美しくしなやかな存在に変容させて示してくれるからだ」²²。

ヒュームとイエイツはエリオットが二〇世紀的精神と呼ぶものの実例で

ある。それゆえイエイツが、ヒュームと同様に、一九世紀社会に浸透していた民主主義の理念を拒絶したのは驚くべきことではない。彼の詩は民主主義の予言者ウォルト・ホイットマンの詩と完全な対照をなす。ホイットマンは半ば韻文、半ば散文である彼の詩の中で、「新しい人間」や人間的で寛容な政府や社会について書いた。イエイツは「新しい人間」やそのような人間のために作られつつある社会を軽蔑していたので、そのことを露骨で簡潔明瞭な彼の詩の中で述べた。前述のように、オーウェルは「文体」と「思想」のあいだには何らかのつながりがあるに違いないといっている。このことは政治思想とこれほど密接な関連を有する芸術思想をもつこれらの作家たちにはおそらく当てはまる。貴族主義的で階級的な社会観を同じようにもっていたシュテファン・ゲオルゲもまた、動詞と名詞の使いかたに気を配ることによって、安定性や厳密さを印象づけようとした。たとえば彼は彫像のような堅固さを生み出すために、「彼は旗を振る」という書きかたよりむしろ、「ここに旗振りがいる」という書きかたをした。このような観点でイエイツについて検討してみよう。

彼の初期の詩はメノンが「非イギリス的なケルト的異境性」と呼ぶものによって特徴づけられる。彼はアイルランドの伝説を用いること、そして古代ゲール文学への愛を復活させることによってヨーロッパの古典的伝統から抜け出ようとした。彼の直喩や隠喩は「ロマン主義運動から受け継がれた過度の文飾」を生み出した。イエイツはあえて冷たい光やちぎれて飛んでいく雲の印象を生み出そうとした。彼の初期の詩は「夢の覚束なさ」をもっている。

そしてそれは真珠のように青白い貝殻に飾られ、
彼女の柔かな胸が上下することに

夏の川のように波打った。

（「オシーンの放浪」）

「覚束なさ」と停滞感、憂愁、過去への関心、ファンタジー、漠然としたケルトらしさが詩の特徴をなしている。

白髪で森育ちの、穏やかな目をしたドルイド僧は、
ファーガスに夢の網を投げたが、破滅については口をつぐんだ。

（「時の十字架に掛けられたばらよ」）

口調や名詞と形容詞の倒置や「穏やかな目をした」のような分割された要素からなる修飾語は、彼の初期の詩の「ロマン主義」のしるしである。彼はしばしば多音節語や長い行や明解なリズムを用いる。

愛する人よ、ぼくたちが泡なす海に浮かぶ白い鳥であればよいのに。
色あせて消えていく流れ星の炎には飽きてしまった。
なぜなら黄昏どきに空の端の下方に見える青い星の炎が、愛する人よ、
ぼくたちの心に永遠に消えることのなさそうな悲しみを目覚めさせ
たから。

（「白い鳥」）

彼の初期の詩は彼の貴族主義への偏愛を示しているが、その偏愛はおおむね高貴な出自をもつ壮麗な美女への愛という形で現れる。

灰色の香煙がもうもうと立ちこめて

神しか目を開けていられない

多くの聖なる回廊を抜けて

貴婦人たちが運んでいく露のように冷たいゆり。

〔彼は忘れられた美を思い出す〕

香煙が立ちこめる輝かしい想像世界に住む誇り高い異境の存在への愛は、ラファエル前派の画家たちや詩人たちによって用いられたようなイメージ、たとえば花、とりわけばらとゆり、またキリスト教の儀式から取られながらもその教えや教義が取り除かれたイメージ、すなわち伝統的な「ロマン主義の」詩的言語以外の何物でもない言語で表現される。

だが彼は一九一六年に次のような詩を書いた。

私は日が暮れるところに

彼らがカウンターや机を後にして、

灰色の一八世紀の家いへのあいだから

生き生きとした顔で出てくるのを見たことがある。

私は会釈し、丁重で無意味な言葉を発して

やり過ごした。

〔一九一六年の復活祭〕

この詩では統語構造は自然であり、口調は会話的で、単語は単音節語が主である。彼が社会的あるいは政治的意味をもつ主題に関心を寄せれば寄せるほど、彼の詩はより直截的で堅牢かつ男性的なものになっていった。エイトは新文明の時代は「厳格で、外科医のように無慈悲で男性的」だろうと述べたが、これはまさしく彼の後期の詩についての記述である。

傲岸不遜な血の力が

塔を生み出し、支配していた

民族から生まれた、

嵐にさらされたこれらの小さな家いえから

これらの壁と同様に生まれた―

からかうつもりで、

私は力あふれる象徴の塔を建て、

そしてその塔の歌を次つぎに作る、

頂上が半ば死んでいる時代を

からかうつもりで。

彼の「思想」が権威主義的なものになるにつれ、彼の詩は一般的に単音節語を多用するようになって、きびきびとしたものになり、行の長さは切り詰められ、リズムは雄渾さを増していった。彼が用いる象徴はより知的でそれほど詩的でないものになり、硬質さと権威を感じさせるものになった。たとえば「塔」、「瑠璃」、「青銅の頭像」、「古代の石の十字架」のように。彼の直喩や隠喩は初期の詩のものとは完全に対照的なものになっている。

そして神から役目を授かって、万物は夢であり、

食うことしか頭がないばかな豚のようなこの世界も、はち切れそう

に肉がつまっていそうな子豚たちも、

風がその主題を変えさえすればたちどころに消滅しなければならな

いということを経明したパークレー。

〔血と月〕

「血と月」のこの箇所では、行が長いが、リズムは複雑で、単語は堅苦しく知的で不調和を感じさせる。それらは主題が知的で、態度が権威主義的であることに見合っている。

私は宣言する。この塔は象徴である。私は宣言する。

螺旋状の渦巻状の錐揉み状の踏み車のようなこの階段は先祖伝来の階段で、

この階段を利用してゴールドスミスも首席司祭のスイフトもパークレーもパークも塔の中を旅したのだ。

態度、感受性、文体、リズム、隠喩のすべてがイエイツの後期の詩の中で混じり合い、かつて書かれた詩の中でもっとも知的で権威主義的で情熱的で、文体にかんするかぎり、もっとも硬質な詩のいくつかを生み出している。それはヒュームが文学における正確さや厳密さや露骨さへの欲望と呼んだものをもっている。

ピアスがクフリーリンを自分の横へ召喚したとき、

郵便局の中から誰が出てきたか。

どのような知が、どのような計算や数や計測が応じたか。

由緒ある一族に生まれたというのに、

汚れた現代のこのような川に投げ出され、

多産な無定形の激情によって難破した私たちアイルランド人は、

垂鉛によって計測された顔の輪郭をたどるために、

固有の闇へ登っていく。

彼は晩年ユスティアヌスの時代のビザンティウムに存在した社会を理想化したように、その芸術を称賛した。そして彼はビザンティウムのモザイク画に文学的に匹敵するような詩を可能なかぎり作り出そうとした。このような試みに成功するのは困難なことであり、それは説明することさえほとんど同様に困難な試みである。しかしながらT・E・ヒュームはこのような種類の芸術は安定性や厳密さの中に永遠性を求め、抽象化を目指す述べた。イエイツは後期の詩において、モザイク画の個この断片に相当する堅牢な、主として単音節の単語を用いている。彼は強烈で重厚なリズムでこれらのばらばらな単語を結びつけ、統合された全体を作り出すが、個この単語はそれぞれの個性を保ち、強調された単語はモザイク画の中でそれだけいつそう色鮮やかな断片のように突出した印象を与えるのである。さらに後期の詩はまさに抽象化を目指しているがゆえに、しばしばわめて知的な印象を与え、不可解な印象さえ与える。

真夜中の皇帝の舗道を、

薪によって煽られず、鋼鉄によって点火されず、

嵐によって消されずに、自らを生み出す炎が飛び回る。

そこへ、死によってすべての激情の迷宮を後にし、

踊りながら、

苦い陶酔を感じながら、

袖さえ焦がせない苦い炎に包まれながら、

血から生まれた霊たちがやってくる

いるかの汚物と血にまたがって
次つぎに霊たちがやつてくる。

霊たちの氾濫が金細工師の仕事場で、
皇帝の金細工師の仕事場で碎かれる。

苦い激情の迷宮が、

新しい霊を生み出し続ける霊たちが、

いるかに裂かれ、銅鑼の音に苦しめられる海が

大理石の床をもつダンスホールで碎かれる。

(「ビザンティウム」)

イエイツの後期の詩には「思想」(すなわち政治的問題や社会的問題の理解のしかたや取り組みかた)と文体とのきわめて確かな相関性が存在している。

VII

一九三三年づけの手紙の中で、彼は自分が信奉する「反民主主義的哲学」について書いた。彼は大衆に指導者を選ぶ能力があるとは信じなかったし、「進歩」という理念を受け入れもしなかった——「人間の未来はかつての姿にきわめて似たもの、すなわちひどく卑しいものになるだろう」。彼は民主主義を標準化のプロセスと見なして蔑んだ。アメリカとドイツは第一次世界大戦後に同一の誤りを犯したというのだった。すなわちそれは「いっぽうは君主制のため、たほうは民主主義のためと称して生を標準化し、結局両者とも不毛な悪魔を生み出してしまふという誤り」であり、「かつてはアメリカもドイツも類型に属さない多様な生を数えられないほど豊富にもっていたのに、今やすべてが類型になってしまった」というのである²³。イエ

イツはワイマール共和国にたいして多くの保守主義者たちが抱いていた蔑みを共有していた。オブライエンは親ファシズムの意見はイエイツが属していたアイルランドのプロテストアント中産階級にあつてはけつして珍しいものではなかったと示唆している。『アイリッシュ・タイムズ』はヒトラーを共産主義への砦として歓迎したし、イギリス同様、アイルランドでもムッソリーニにたいする称賛とソビエト・ロシアにたいする非難が続いていた。イエイツは未来についてはほとんど希望をもっていなかった。彼はすべての体系的な理想主義は「数学という薄っぺらなもの」によって殺され、生命を失ってしまったと考えた。一九三二年に彼は「民主主義は死に、力が古代に有していたその権利を要求している。そして力を有するこれらの男たち(不正規兵たち)は自分たちに支配権があると信じている」²⁴と書いた。彼は民主主義やヒューマニズムの伝統の崩壊とともに、一つの時代の終末、すなわち私たちの文明の終末が近づいていると信じた。彼は一九二〇年代のはじめに「恐怖時代」を予見したが、新時代がどのような時代になるかはそのときにはわからなかった。第一三相——予見不可能な相——が最大の危機の瞬間に影響力を及ぼすのである。彼は新しい力や新しい状況を予見することはできなかった。

そしてその生誕のときがついに訪れたとき、

どんな野獣がベツレヘムへぎこちなく向かうのか。

(「再臨」)

しかし変化を避けることはできない。彼は問う。

国家は今ではすべて、この塔のように、

頂点が半ば死んでいるのか。

〔血と月〕

現代社会はパークのような男たちを生み出せそうにない。

より傲岸不遜な知性によって、国家とは一本の樹木であり、

鳥たちのこの征服不可能な迷宮は数学的な同等性には、

何世紀にもわたって枯れ葉しか撒かなかったことを証明したパーク。

イエイツは民主主義は一八世紀のホイッグ主義から生まれたと信じた。さもなくばすくなくともそれが一八世紀の自由意志論から作られたと信じたのは間違いない。彼はこのような思想を完全に拒絶した。

五番目の賢人。

私たちの思想の源は、

六番目の賢人。ホイッグ主義を嫌った四つの偉大な精神が源だ。

五番目の賢人。パークはホイッグ党員だった。

六番目の賢人。

知られていようがまいが、

ゴルドスミスもパークもスウィフトもクロインの主教も

ホイッグ主義が嫌いだった。しかしホイッグ主義とは何だろう。

それは聖人の目や

酔っぱらいの目ではけっして見ない、

すべてを標準化する、悪意に満ちた合理主義の精神だ。

七番目の聖人。

今では世間の連中は一人残らずホイッグ党員だが、そんな連中にたいして、私たち老人は一団となって抵抗しているのだ。

〔七賢人〕

イエイツは「合理主義的精神」と聖人や酔っぱらいの直観主義的精神を対比した。聖人や酔っぱらいの認識は真の知恵であり、彼らは学校教育を受けていないがゆえに、おそらくなおさらそうなのである。人民主義、すなわち教育を受けていない非知性的な人びとの創造性や優越性への信念と、合理主義的経済主義的要素主義的精神へのロマン主義的憎悪がたつぷり染み込んだ、一九世紀のドイツの歴史学や文献学とのあいだには、おおいに共通性がある。これらの歴史学や文献学は合理主義的経済主義的要素主義的精神を西欧文化の革命主義的合理主義的潮流の源であり、また所産として攻撃したのだった。イエイツの思想における人民主義的要素は彼の貴族主義的態度と矛盾しない。ブルジョア社会の合理主義的功利主義的要素にたいして懐疑的なロマン主義は人民主義的傾向を示す。そしてイエイツの人民主義は社会学的信念というより、むしろロマン主義の文学的影響の結果である。彼は個性的精神の喪失や合理主義や公教育の普及と社会における暴力の増大とのあいだに関連を見出した。彼は通俗的科学のいう客観的物質や客観的空間の存在を信じる人びとが世界を支配しており、そのような人びとは「類比も交換も不可能な個性を有する昔ながらの人間を切り刻むことが可能な存在へ代えてしまうので」²⁵、革命という名の大虐殺が次々に起こり、殺人兵器が増加し続けるのである。

彼は創造的精神が学校教育によって押さえつけられるのを望まなかった。しかし選択肢は詩人になるか無知なままで留まるかのいずれかなのである。イエイツは少数の優れた詩人が生み出されれば、大多数の人びとは文盲のままでも構わないと考える。彼が望んでいると称している情熱的で直観主義的な生活は、もし次のようなことが起きても構わないならば、不可能なことのように見える。

子どもたちは計算や歌、

読みかたや歴史、

裁縫や最良の新式の作法を

学んでいる。

〔児童たちの中で〕

イエイツは現代生活の痛ましく困難な問題から逃れるために、素朴な情熱の人間の仮面をある程度まで用いた。彼は「超自然的なイメージの半ば理解可能な教え」に現代社会が抱える問題へのより深い認識の代用をさせる。イエイツがロマン主義的な美を用いたのは、つねにとはいわないがすくなくともときには、責任の放棄を意味した。彼は絶望からの逃げ場を詩に求めた。結局それはときには戯れ歌という形を取った。

からかうつもりで、

私は力あふれる象徴の塔を建て、

そしてその塔の歌を次つぎに作る、

頂上が半ば死んでいる時代を

からかうつもりで。

〔血と月〕

晩年近くになると、社会にたいする彼のペシミズムを和らげてくれるのは循環史観のほかにはなかった。彼は進歩という理念をまったく信じていなかった。すなわち社会が完成に向かっているとは信じなかった。実際彼の唯一の希望は二〇世紀の諸潮流の完全な反転だった。彼には絶望からさえ

何かが生まれるかもしれないという考えがあったし、何らかの大変革がまもなく起こるという確信があった。

この時代も次の時代も

どぶから湧いてくるので、

幸福な男と通りすがりの惨めな男との区別が

誰にもつかない。

〔古い石の十字架〕

「再臨」において表現されているのは、未来は混沌と苦しみと暴力から生まれてくるというこの思想である。伝統や権威の崩壊とともに、現代文明はたんなる混沌と化する。

旋回しながらその輪を広げていく鷹には

鷹匠の声が聞こえない。

すべてがばらばらになり、中心がなくなる。

たんなる混沌が世界に広がる。

第一次世界大戦が多くの犠牲者を出したのは彼の存命中のことだったし、ブラック・アンド・タンははるかに強力な印象を彼の心に与えた。

血の色をした濁流が広がり、いたるところで

無垢の儀式が溺死する。

エセル・マニン宛の一九三六年の手紙の中で、彼は「私は鈍感な人間では

ない。ヨーロッパに今起こりつつあるできごとにたいする恐怖ですべての神経が震えている」と書いた。この手紙の中で彼は国民の苦しみに関心なすべての現代の政府への嫌悪を明らかにした。彼は「羊が山羊を導こうとするときには」暴力が随伴せざるをえないと信じた。民主主義の崩壊の証拠の一つは、

悪人どもが情熱的な力に満ちあふれているというのに、
善人たちに確信がまったく欠けている。

ことである。アイルランドにはパーネルの仕事を受継ぐものは皆無だったし、彼の思想や勇気を受継ぐ指導者も皆無だった。イエイツはこのことはアイルランドにとってひどく不幸なことだと考えた。

もしデ・バレラがパーネルの心臓を食べていたなら、
口の軽い扇動政治家が天下を取ることはなかっただろうし、
内輪揉めが国を分裂させることもなかっただろう。

〔パーネルの葬儀〕

もしパーネルの貴族的精神を受継いでいたなら、デ・バレラは指導力を発揮して事態を打開していただろうし、現代的な潮流の再度の流入を許さなかっただろう。

暴力と恐怖のイメージはますます頻繁に現れるようになる。彼は破局が近づいてきていると感じていた。「内戦時の瞑想」において彼は私たちを閉じこめている暴力と混乱について語っている。

私たちは閉じ込められて、私たちの不安に鍵が掛けられる。どこかで人が殺され、家が焼かれる。だが確かな事実はまだ伝わってこない。

苦しみと死だけが生なましく実感される。

昨夜彼らは血みどろの若い兵士の死体を運んでいった。

憎悪が暴力を生み、暴力がふたたび更なる暴力を生む。やがて、

実質は愛よりむしろ

憎しみの中により多く含まれていた。

という事態になる。恐るべき力を宿す韻文形式を用いて、彼は市民生活をじよじよに襲い始めた不安や混乱や暴力を記述した。

見慣れた異形の幻が心の目に映る。

「殺人者たちに復讐を」という叫びが起きる、

「ジャック・モレーのために復讐を」。

灰色のぼろ服姿やモールをつけた姿で、怒りに駆られ、怒りに心乱され、怒りに飢えた兵士たちが、殴りあい、腕や顔に噛みつき、猪突猛進し、腕を大きく広げるが、何も抱きしめることはできない。

彼はこのとき暴力への大衆の無関心や無感覚こそが責められなければならないと信じた。この非人間的な無関心が「内戦時の瞑想」の最終セクションにおいて記述されている。第一次世界大戦以前の一・二世代のあいだ、私たちはこのような無関心から抜け出ることができそうに見えた。しかしイエイツは戦間期の社会へのこのような無関心の影響を認めた。

灰色のユニコーンたち、アクアマリンの目、
半分閉じた震えるまぶた、ほろほろの灰色の服やモール、
怒ってきらめく目、怒って細くなった腕が、

真鍮の鷹たちの冷静な大群に場所を譲る。

自己充足の夢想、きたるべきものへの憎しみ、

過ぎ去ったものへの哀しみが消え、

逞しい爪、目の喜び、そして、

月をかきけす無数の翼のがちゃがちゃという音だけが残る。

混乱と暴力はイエイツに私たちの文明が終末を迎えようとしていることを教える。私たちの文明に代って、べつの文明が出現するだろう——「時代は反転する」——それゆえおそらく新しい文明は私たちの文明とは反対のものになるだろう。

たしかに何らかの啓示が間近に迫っている。

たしかに再臨が間近に迫っている。

彼によれば、キリスト教文明は誤った価値に重きを置いてきたのである。

博愛主義の理念は結局野蛮と暴力を生み出した。民主主義の理念は「たんなる無秩序」を生み出した。いまや彼は知る。

石のような眠りの二〇〇〇年は

揺れる揺りかごに苦しめられて悪夢に変わった。

メノン「再臨」を「ファシズムの到来にたいする漠然とした暗示」と記述している。しかしこの詩はそれに留まるものではない。この詩は思想や感性の秩序を根本的に変えなければならないというイエイツの信念の表現である。現代社会には「存在の統一」が欠如しているので、思想も感性も無秩序になっている。彼は、「存在の統一」は、「最大の障害物について絶望せずに瞑想し、意志の力を最大限に発動させることによってのみ達成され」うるという。イエイツ自身がこの統一を達成したかどうかは疑わしい。彼は結局自分、あるいは他の人びとが尊重しているものすべてを嘲笑する以外には絶望を避けることができなかったようだ。

さあ、偉人を嘲笑しよう……

さあ、賢人を嘲笑しよう……

さあ、善人を嘲笑しよう……

そして、嘲笑する人びとを嘲笑しよう……

VIII

イエイツは現代社会をひどく不愉快に感じていたが、ロシア共産主義についてはその成立のはじめから拒絶した。イギリス政治についての彼の主要な批判はその原動力が唯物論であるということだった。彼はこのことは

マルクス主義的価値基準——「唯物論の最前線」——にも当てはまると考えた。弁証法的唯物論や人類平等主義の原理に対立するものとしての唯心論や英雄的精神をもつ個人への信奉は、彼に共産主義を拒絶させるほかはなかった。「私の望みはアイルランドが（イギリスが受け入れると思えるものはすべて拒絶するという狂信的能力の影響で）マルクス主義革命やあらゆる形態のマルクス主義的な価値の定義を信奉するのを差し控えることである。私はマルクス主義的価値基準を現代における唯物論の最前線であり、不可避的な殺人へ導くものと考えている」²⁶。一九三三年に彼はアイルランドにおける共産主義の阻止に役立つ社会哲学の創出に努めていた「いま出現の気配を示しているものは宗教によって修正されたファシズムである」²⁷。彼は権威主義的支配の時代が一世紀以上にもわたる自由主義や民主主義の影響を破壊するのを望んだ。そして彼はファシズムの中に自分が必要としているものにもっとも近いものを見出した。

しかしながら、「再臨」を書いた一九二一年に早くも暴力と恐怖の到来を見抜いておきながら、数年後に、ファシズムが自らのうちに暴力と虐殺の種子をもっていることに気づかなかったのは奇妙なことである。彼はよりよい社会の創出のために暴力を使つてよいものかどうかについて首尾一貫性を欠いているようだった。彼はオーデンやスペンダーを批判したが、それは彼らがマルクスの社会主義やダグラス少佐に支えを求めたからだだった。彼によれば彼らは行進する足を求めるといふ誤りを犯したのだ。「私たちの時代の永続的表現はこのような明瞭な選択をすることではなく、意志の内部の、鋼鉄のような硬さをもつ冷たいものへの感覚の中にある」²⁸。それにもかかわらず、彼自身は大衆の支配を打ち破るために暴力や行進する人びとを擁護した。そして彼自身の詩に暴力への嗜好が映し出されていることもある。

けれどがつんと殴れば心がはずむ。

（「曲が同じ三つの歌」第一部、第一連、第四行）

けれど大義をしつかり抱いて殴れば楽しい。

（「曲が同じ三つの歌」第一部、第三連、第四行）

この詩「曲が同じ三つの歌」の第一部のリフレインは次のようなものである。

狂信者たちは私たちがすることをすべてだいなしにする。

狂信者をやっつけろ、ピエロをやっつけろ。

やっつけろ、やっつけろ、彼らをハンマーでやっつけろ、

「オドンネル勝て」の歌にあわせてやっつけろ。

暴力の強調はこれらの「歌」の第二部においてはるかに著しくなる。イエイツはそこでアイルランドの独立のキャンペーンを徹底的に押し進めるよう主張している。

名のある一門をすべて義認せよ、

血を流して死んだすべての人びとを義認せよ、

絞首台にかけられたすべての人びとを義認せよ、

逃亡したものも留まったものもすべて義認せよ。

この詩のコーラスは次のようなものである。

「犬をみんな溺れさせろ」と若い女が怒っていった、

「あいつらは私のがちようと猫を殺したんだ。」

用水桶の中で溺れさせろ、溺れさせろ、

犬をみんな溺れさせろ」と若い女が怒っていった。

これらがイエイツ自身の感情であると断定することはできない。しかしこれらの詩にこれほど印象的に表現されている暴力への態度は、たとえば恐怖が表明されている「一九一九年」における態度とは同一ではない。ここでの態度は愚かなほどに暴力的な人びとへの共感を思わせるものであり、絶望から発した復讐への暴力的な衝動さえ思わせるものである。これらの歌はおそらく歌われるために書かれたものだった。イエイツはこれらの歌を後に推敲し、タイトルを「三つの行進歌」に変えた。

これらの書き換えられた歌の第二部の中では、イエイツ自身が行進する足への欲求を露にしている。オリジナル版の「チョークで印をつけた六フィートの長さの穴」は、書き換えられた版では、行進する足に換わった。彼は「行進」という言葉を遊び始める。

一陣の風が吹く、ああ、行進する風よ、

昔の歌を歌いながら、風よ、行進せよ、

歌を聞かせながら、行進せよ、行進せよ。

一九三三年に彼は次のように書いた。「もし若者であれば、私は四年間の戦闘を歓迎するだろう。なぜならそれは教養ある諸階級のあいだの統一を生

み出すからだ」²⁹。メノンによれば、善悪の区別を弁えない大衆は専制にたいて完全に従順になるので、イエイツは暴力や専制をかならずしも悪とは見なさなかった³⁰。

針金につながれたこれらの木製の口と手足によって、

自由を奪われ、罪状認否を問われ、まごつかされ、曲げられ、のばされ、
従順で、

善悪の区別を弁えず、

目に見えない神秘的な霊のなすがまま。

彼らはあまりに現実離れをしていて、

私たちの死とはかけ離れた死の中にあり、

私たちを従わせているという喜びも感じていない。

（「マイケル・ロバーツの二重の幻想」）

暴力や苦しみへのこのような態度は「青銅の頭像」においてピークに達する。何年も前に「再臨」において見ていた「恐怖の幻」をふたたび見るのである。いまや彼は見る。

この汚れた世界はますます堕落していく。

ひよろつとした一族がのし上がり、偉大な一族が干からびていく。

先祖伝来の真珠はすべて豚小屋に投げ棄てられ、

英雄的な夢想はピエロやならず者に嘲笑される。

虐殺が救うべきものたちは残っているだろうか。

世界はこのような状況にあり、貴族たちは没落していき――「偉大な一族が干からびていく」――、詩はそれを味わい始めることさえできない連中に嘲りを受けているというのだ。彼はきたるべき破局は救うべきものたちすべてを救うだろうとし、それを歓迎する気になっているように見える。彼はいやしくも救う価値をもつものが残っているだろうかという疑問さえ感じている。由緒正しい諸階級は消滅し、「空虚な、カメラのレンズのような目をしたたんなる大衆がいたところにはびこっている」。文明が終末を迎えるとき、すべてが転倒される。すなわちニーチェがいう「諸価値の転換」が起きる。上記の引用において、「救う」という言葉は虐殺から利益を得る人びとが、たとえ少数であっても存在するということを暗示している。一九三八年に出版された「ボイラーの上で」において、彼は戦争が起きず、ヨーロッパ文明が没落を甘受する恐れがあるといった。彼はまた次のように書いた。「戦争がもたらす恐怖のために、そして信念が変化し、文明が再生されるために戦争を愛するがよい」³¹。晩年の詩において、彼は文明についての完全なペシミズムを表明した。かつては「まったくの戯言」だった総力戦が、晩年の彼には、現存する悪を破壊するのに十分な力をもつ社会変革を遂行するための唯一の手段に思えた。イエイツの循環史観、すなわち大車輪や様々な種類の文明の交代への信念、そして権威主義の必要性への信念は彼を未来へのこのような恐ろしい見かたに導いた。晩年の彼は大衆にたいして完全な不信の念を抱いていた。第二次世界大戦を経験していたら、彼の態度が変わっていたかどうかはたんなる推測には違いない。しかし自分の思想が実践されているのを見れば、おそらく自分が懲らしめられたという印象を得ただろう。後に見るように、この戦争はパウンドやルイスに戦争以前には明白でなかった人間的共感を一定程度喚起したのである。たほう、イエイツはアイルランドの反乱に暴力と苦しみを見ていたに

もかわらず、更なる暴力に期待を寄せていたのは明らかだった。

イエイツは現代西洋社会の悪にたいする自分の認識が経済学的あるいは政治学的分析の結果ではなく、自分の循環史観そして妻のオートマティック・ライティングに基づくと私たちに信じさせたがった。

：丸々一時間のあいだ、

彼女は学者で、私は子どものようだった。

父親もいないのに、私が読んだ無数の本のうちのどの本も、

彼女の心や私の心の内なるどのような思想も、

生み出さない真理が生まれてきたのだ。

この説明がどれほど正しいかはわからない。イエイツはじつに巧みに完全な物語を構成して、詩人と神秘家という役割を果たした。メノン³²は「進歩」にたいするイエイツの嫌悪が彼の心を歪め、彼を奇妙な交友関係や関心に導いたのだといった。彼が循環史観によって社会についての断定的意見を述べたのは、分析的思考にたいする嫌悪のためだった。しかし『幻想録』に含まれている哲学は、彼自身は純粹に直観的なものであると弁明しようとしているが、極度に分析的である。彼が結論に達したのは、直観的であるとともに主張しようとも、世界という見世物舞台上で上演されているものへのある種の反応を通してだった。

彼の考えはおおまかにいえば次のようなものだった。キリストが生まれたときに、宗教的生活が「始元的」になり、世俗的生活が「対抗的」になった。私たちの時代においては、対抗的体制が接近しつつあり、それは現在のキリスト教時代を反転させるだろう。このような大きな変化は起こりそうには見えない。なぜなら「たんなる混沌が世界に広がる」ばかりだからで

ある。しかし暴力や恐怖、そして秩序の崩壊は一つの時代の終末の兆候であり、新しい時代の誕生が近いことのしるしなのである。彼は自分の詩が暴力的でパーソナルな性格をもっているのを、ある程度この接近しつつある変化のせいにした。

おそらく私が詩人であって画家ではないから、ビヨンの苦しみのはうがはるかに痛切に感じられるのだろう。ビヨンにおいてはじめて人間の魂は、消えつつある教会の助けを得られずに、想像力にとつてはつねに現前する死を前にして孤独に立ち尽くすのである。それともまったく違った時代の人物ながらも類似した相に属すオーブリー・ビアズリーを想起し、ビヨンの苦しみに時代の終末に接近するとき力を増していく現代の良心を読み込んでしまうのだろうか。無慈悲な自己審判と私が思っていたものはたんなる英雄的陽気さだったのかもしれない³²。

これは彼の晩年の詩の活力、すなわち「悲劇的陽気さ」が、ある程度社会的原因——時代の終末の接近——によってもたらされたものであるということを示唆する。

『幻想録』の中で、イエイツは自分を取り囲んでいる暴力と苦しみの世界においても十分有効な哲学を模索しようとした。

私は、たとえ大砲の音が

世界のいたるところで轟いたとしても、

冥想の中にしっかりとくるまれている心が欲しい。

（「万霊節の夜」）

彼は自分の体系の半ば神秘的な正当化を試みようとしたが、その意図に反して、彼の哲学ほど融通性を欠いた機械的なものはない。なぜなら彼の哲学では、同一の相に属す人びとはすべて同一の性格をもち、歴史は大車輪の回転とともに繰り返されるからである。現代文明への極端な嫌悪は、文明の未来への関心とあいまって、彼に権威主義を唯一の解決策として受け入れさせた。彼はある種の権威主義的支配を現代社会が直面している諸問題の唯一の解決策と見なした。すなわち少数の人びとに権力が委ねられなければならない。なぜなら混沌には厳格な権威によってのみ秩序が与えられるからであり、またそれは多数派の支配の時代の後では不可避だからである。「歴史とはきわめて単純なものである——多数派の支配の後には少数派の支配が訪れる。昼の後には夜が訪れ、夜の後には昼が訪れ、これが永遠に繰り返されるように」³³。永遠回帰という観念はファシズムの文学的先駆者たちの内の二人、ビーコやニーチェの著作にもある。アイルランドにかんするかぎり、彼は「教養ある諸階級の専制的支配こそ諸問題の唯一の解決策であるとたえず訴えて」いた。ナイトは彼をファシストあるいは反動家と評するのは彼が貴族的生活を重視した理由を無視することによってのみ可能であるという。しかし『幻想録』において彼が称賛するのは貴族的生活ではなく、それに備わる権力である。循環史観によれば、新しい時代はこの権力に相応の敬意を表するのである。彼の「ファシズムのおよび反動的」傾向は次の引用にはっきりと現れている。

対抗的体制は内在的な力に従順で、情熱的、階級的、複合的、男性的、非妥協的、外科的である。接近しつつある対抗的なものの流入と知性が準備を開始した対抗的体制が完全な組織化に達するのは……大年

が知性的頂点に達する瞬間である³⁴。

彼は宗教的社会や政治的社会の偏見や専制にたいしては戦ったが、新しい文明、すなわち「生活の隅々まで階級制度がいきわたり、すべての偉人たちの邸の玄関に夜が開けると請願者たちが押し寄せ、巨万の富を少数の人びとが手中に収め……不平等が法制化されている、完璧な対抗的貴族主義的文明……」³⁵には期待を寄せた。現代政治の用語でいえば、このような社会にもっとも近いものはファシズムである。しかしイエイツはある種のファシズム的システムへの嗜好をはるかにほつきりと示した。一九二二年五月に彼は、アイルランドでは大衆的指導者たちが代表するのは、投票の訴えを拒み、しばらくのあいだはそれを妨げることもあるきわめて強力な少数派であるといった。一〇月には彼はこれを「民主主義にたいする少数派の反逆」と呼び、保守主義への潮流、そして専制政治への潮流さえ見出した。そして九月には彼はアイルランドは、ヨーロッパの他の国と同様、保守主義的政治への回帰、すくなくとも「論理から歴史意識への置換」を準備しつつあると考えた。これが書かれたのはムソリーニが政権の座に着いた年であり、イエイツがファシズム体制のイタリアに言及しているのは明白だった。「アイルランドは現在の無秩序に反発し、個人主義体制のイタリアに目を向けている」³⁶。彼がこのような動向を好んでいたのもまた明白だった。論理に代えての「歴史意識」はまさに彼が望んでいるものだった。ファシズムを信奉する青シャツ団の創立者は彼が選んだ指導者のオダッフィをイエイツの下に派遣し、イエイツの「反民主主義的哲学」を聴講させた。一九三三年七月にイエイツは、「政治は英雄的になりつつある……何らかの悲劇的狀況の出現に備えて、ファシズム的反対勢力が秘密裏に組織されつつある……私たちの財布にはほとんど金が入っていないので、いつ

でもひっくり返して見せることができる。だからヒトラーが金のいっぱい詰まった財布を弄んでいるのを見て競争意欲を掻き立てられないはずがない。私たちが選んだ色は青だ。そして青シャツたちが国中を行進して回っている」³⁷と書いた。オブライエンが示唆するように、たとえイエイツが第一次世界大戦によって解き放たれたものについて、また次の戦争が切迫していることについて、深遠で悲劇的かつ直観的で聡明な認識をもっていたとしても、彼は文明の変容をもたらすものとして暴力を歓迎したのだ。彼によれば、ホッブスによって基礎づけられ、百科全書派とフランス革命によって広められた運動の命運は尽き、きたるべき世紀にとっては無効になってしまったのである。大車輪は一回転し、古代の専制的原理がふたたび自己主張し、力が「古代の権利」を主張し始めているのである。人間の苦しみという観点から見られれば、犠牲者にたいする同情が示されることもあった。歴史的事件、すなわち一つの歴史的循環の終結そして新しい循環の開始として見られれば、暴力は歓迎された。彼は何らかの大災害から新しい社会が生まれ、このような手段のほかに、人間が救われる道はないと考えた。彼の思想は独創的なものでもなければ、珍しいものでさえない。ソレルもまた暴力を再生の力と見なしている。大変革の後に新しい価値体系や新しい文明が生まれるが、価値体系自体が変革をもたらすのに有効な働きをするという思想はニーチェ的である。一方、シュペンゲラーは戦争と新しい「プラトン年」の開始が現代文明を崩壊させるのを予言した。一九三〇年代の政治の用語を使えば、ヨーロッパを災害に向けて駆り立てているのはファシズムの価値体系だった。そしてこれが勝利を収めてはじめて新しい文明は、非妥協的、外科的、男性的、階級的な文明——「不平等が法制化されている」文明になるのである。

幸福な社会の定義にあたって、イエイツがほんとうに関心をもっていた

のは、その社会が芸術、とりわけ文学の成長を促進するかどうかだった。

彼はジョージ・ラッセルが平易な言葉で若者向けの実践的提言として文化、経済、政治における民族的統一の方針を策定するエッセイを書くことを望んだ。この提言はつかの間の危機などではなく、これからさきの五〇年に向けられるべきものだった。「この統一と文化という概念は私の体系における未来の解明の基本原理になっている」³⁸。同じ手紙の中で彼は、「私たち文学者は政治家ではないから、現在の社会は私たちの責任外である。私たちが責任を負うのは未来の社会のある部分にだ。私たちの言葉は未来の社会をそれほど喜ばせはしないだろう。未来の社会は私たちが肝心な点について沈黙を守ったときよりはるかに不機嫌になるだろう」といった。このような肝心の点の一つは優れた文学のしるしとしての「内向性」である。

「内向性」の反対物としての「一般化」は「修辞を生み出し、即座に人気を勝ち取り、大衆を組織し、政治的成功をもたらす。キプリングの詩やマコーリーのエッセイがこの例である。よいしきたりや古歌や昔話や楽しいうわさ話、すなわち民族精神が息づくアイルランドの田園地帯を後にしてアイルランドの田舎町を訪れると、機械的なリズムを刻む流行歌や新聞から切り取られた思想といったかたちで一般化に出迎えられる」³⁹。都市化とマスコミュニケーションは、優れた文学を民衆のレベルにおいてさえ生み出す「存在の統一」を破壊する。イエイツは文学にたいする伝統的生活様式の崩壊の悪影響を再度強調した。彼の詩人としての生涯における最大の苦闘の一つは、農民の言葉の威厳と素朴さをもつ詩的言語を完成させることだった。彼は詩はその根拠を日常生活のなかにもたねばならないという信念をもっていたが、同時に詩人は貴族の中から友人を選ぶことができなかったらならないという信念をもっていた。このため、彼はシングの戯曲のようなありふれた農民生活を描くドラマへの情熱を放棄し、選ばれた観客

のための様式化されたサロン劇の執筆へ向かった。

民主主義の擁護者は富や余暇や特権を選ばれた少数の人びとの特典だと見なす。したがって彼はそのような特権は破壊されるべきだし、富や余暇はより平等に人びとに分け与えられるべきだと考える。しかしイエイツは余暇や富は「もつとも生命あふれる人びとのための土壌」として作り出されたものと信じた。次の引用は想像力あふれる文学は余暇と富に依存するという彼の信念を暗示する。「象徴主義の文学は生活が存在自体によって征服され、もつとも生命あふれる人びとが最大の力をもつような社会体制のものであつて、議論にもとづくような社会体制のものではない」⁴⁰。彼は現代文明をそのような議論の所産と見なし、芸術や文学にとつての最大の危機は革命的社会の専制や教化、そして政治的宗教的プロパガンダに由来すると考えた。人間をその真の環境、すなわち「もつとも生命あふれる」ものすべてから引き離れた産業革命によって生み出された社会がそのような革命的社会の一つである。彼は想像力あふれる真の文学者が現代社会を甘受できるとは信じなかった。生涯を通じて彼はそのような人間は現代社会の影響からの自立を保たなければならぬと強調した。彼の唯一の希望は私たちの文明の反転にあり、これが切迫していると彼は考えた。これが起こらなければ、文学には生き残るチャンスがほとんどなかった。文学がなければ、人間生活は無意味なものになってしまうのである。

イエイツの社会にかんする発言を文字通りに受け取りたがらない多くの人びとは、彼の意図はほかにあつたと主張している。たとえば、ドロシー・ウェルズリーは、明らかに正しくないのだが、「貴族主義」という言葉でイエイツがいたかったのはたんに「誇り高い英雄的精神」のことだったといった。これは、イエイツが何を称賛し、擁護しようとも、それは「もつとも生命あふれる人々」の名においてなされたという理由で、彼は社会的

反動ではなかったと証明しようとするL・C・ナイトにも当てはまる。ナイトはこのような「生命をほとばしらせる噴水」の強調は、イエイツが人間の価値についてもっとも重大な判断をする際に援用する基準を提供すると主張し、ブレイクの「生きているものはすべて神聖である」という言葉を「生きている」に強調を置いて引用する。ナイトはこの言葉が「生きている」ない人びと——合理主義者たちや民主主義者たちや科学者たちやジャーナリストたち——すべてにたいするイエイツの憎悪を説明し、正当化するといいたいのである。しかしブレイクが生きているものはすべて神聖であるといったのは確かだが、彼の言明はイエイツとは異なり、「生きている」という言葉の恣意的な定義に依存していない。

イエイツは過去について多くの仮説を述べた。そして過去にたいする彼の態度を分析しながらない批評家たちはそれらの仮説に同意してしまっているのだ。彼の偏見があるがまさに理解し、認識することと、呪文を唱えてそれらを追い払うこと、すなわちそれらをまったく別のものという張ることは同じではない。イエイツは二〇世紀社会を受け入れようとする努力をほんのわずかしかなかったし、そのほんのわずかな努力も実を結ばなかった。彼は思想的道德的いいのがれの罪を犯さずに、合法的に現代文明を拒絶することができたおそらく最後の詩人である。彼は、社会の構造や本質に様々な大きな変化が起きた時代に生きた。生きたばかりではなく、詩を書き続けた。このような変化をすべて受け入れようとすれば、おそらく超人的な適応力が必要だっただろう。彼の基盤は一九世紀にあったので、彼が「最後のロマン派」だったのも無理はなかったし、彼はシェリーと同様、自分が生きている社会の欠陥について鋭い認識をもっていた。しかし彼にはいきづまりを打開するためのいかなる建設的方法も見出せなかった。次の引用はジョージ・オーウェルのエッセイについてのレイモンド・ウィ

リアムズの書評の一部であるが、イエイツにも十分当てはまるだろう。

これは若き日の急進主義者が成熟して保守主義者になるというような、珍しくもない歴史上しばしば見られる症例などではない。私たちの時代においては、そんな転向は瑣末なことにすぎない。これはもつと入り組んだ症例であり、ひどく定義が難しい。だが現代の精神史においては最重要な症例である。つまり怒りから怒りへの転向であり、大義と交差する怒りから大義を超えた怒り、問

答無用の怒りへの転向なのだ⁴¹。

彼が晩年求めたもの、そして彼に最大の満足を与えたものは、このような種類の怒りだった。

私に老人にふさわしい狂暴さを与えてくれ。

私は自分自身を作り直さなければならない。

タイモンやリア、

あるいは真理が呼び掛けに従うまで壁をたたいた

ウィリアム・ブレイクを

理想として。

（「イエーカーの草地」）

彼の遺作とほとんど見なせる詩は自分の詩を擁護するものだった。彼は未来のアイルランドの詩人たちに自分を模範にするよう訴えた。

アイルランドの詩人たちよ、商売に習熟せよ。

折り目正しいものたちを歌え。

頭のとっぺんから足の爪先まで不細工で、

卑しい連中の卑しい行為から生まれたせいで

物覚えの悪い心と頭をもつ、

いま成長中の連中を嘲笑せよ。

農民たち、

それから馬を乗り回す郷紳たちや

修道僧たちの聖性、その後には

黒ビール呑みたちの好色な笑いを歌え。

七〇〇年にわたる英雄的な時代のあいだに

殺されて土に帰った陽気な貴族たちや

貴婦人たちを歌え。

きたるべき時代にも

私たちが不屈のアイランド人でいられるよう、

君たちの心を過ぎ去った時代に向けよ。

(「ベン・ブルベンのふもとび」)

イエイツが到達した境地は悲劇的ストイシズムだったというのがもともと適切だろう。それは人生は悲劇だが、喜劇を演じるように、少なくとも陽気に生きなければならないという信念である。結局彼は現在の時代が反転するまで、想像力あふれる人間にできることはそれから自分を引き離すこと以外にないと信じた。

生にも死にも

冷たいまなざしを向けよ。

馬上の人よ、過ぎ去るがよい。

原注

1 Yeats, *Letters*, p. 837.

2 *Ibid.*, p. 714.

3 Hough, *The Last Romantics*, p. 218.

4 Yeats, *Letters*, p. 831.

5 Menon, *The Development of W. B. Yeats*, p. 1.

6 Gibbon, *The Masterpiece and the Man*, p. 45.

7 Yeats, *Autobiographies*, p. 225.

8 Yeats, *Letters*, p. 876.

9 Moore, *Ave*, p. 217.

10 *Ibid.*, p. 851.

11 *Ibid.*, p. 881.

12 *Ibid.*, p. 219.

13 Yeats, *Autobiographies*, p. 171.

14 *Ibid.*, p. 474.

15 *Ibid.*, p. 456.

16 *Ibid.*, p. 462.

17 Quoted by Hone, *W. B. Yeats: 1865–1939*, p. 365.

18 Hough, *The Last Romantics*, p. 230.

19 Yeats, *Autobiographies*, p. 465.

20 Moore, *Ave*, p. 217.

21 Menon, *The Development of W. B. Yeats*, p. 67.

22 Yeats, *A Vision*, p. 279.

23 Yeats, *Letters*, p. 661.

24 *Ibid.*, p. 695.

25 Yeats, *On the Boiler*, p. 26.

26 Yeats, *Letters*, p. 656.

27 *Ibid.*, p. 808.

28 *Ibid.*, p. 837.

- 29 *Ibid.*, p. 805.
- 30 Menon, *The Development of W. B. Yeats*, p. 91.
- 31 Yeats, *On the Boiler*, p. 20.
- 32 Yeats, *A Vision*, p. 290.
- 33 Yeats, *Letters*, p. 812.
- 34 Yeats, *A Vision*, p. 263.
- 35 *Ibid.*, p. 277.
- 36 Yeats, *Letters*, p. 693.
- 37 *Ibid.*, pp. 811–12.
- 38 *Ibid.*, p. 667.
- 39 *Ibid.*, p. 534.
- 40 Yeats, *Autobiographies*, p. 514.
- 41 Raymond Williams, *Observer*, May 21st, 1961.

原著引用文献リスト

- Gibbon, M., *The Masterpiece and the Man*, Hart-Davis, London, 1939.
- Hone, J., W. B. Yeats: 1865–1939, Macmillan, London, 1942.
- Hough, G., *The Last Romantics*, Duckworth, London, 1949.
- Menon, N., *The Development of W. B. Yeats*, Oliver and Boyd, Edinburgh, 1942.
- Moore, G. Ave, *Salve, Vale* (3 vols), Heinemann, London, 1937.
- Yeats, W. B., *Autobiographies*, Macmillan, London, 1955.
- *A Vision*, Macmillan, London, 1937.
- *Collected Plays*, Macmillan, London, 1952.
- *Collected Poems*, Macmillan, London, 1958.
- *Essays and Introductions*, Macmillan, London, 1961.
- *Letters* (ed., Wade), Hart-Davis, London, 1954.
- *On the Boiler*, Cuala Press, Dublin, 1938.

訳者解説

ここに訳出したのは John R. Harrison, *The Reactionaries: Yeats, Lewis, Pound, Eliot, Lawrence: A Study of the Anti-Democratic Intelligentsia* (1966, New York: Schocken, 1967)の第一章“W. B. Yeats”である。

ウィリアム・エンプソンは、本書に寄せた序文で、「本書の価値は、イエイツ、ルイス、

パウンド、エリオット、ロレンスのファシズムにたいする盲目的な共感 (weakness) の証拠を、公正な理解の下に、冷静に提示していることである」と述べている。しかし、すくなくとも、イエイツの「ファシズムにたいする盲目の共感の証拠」として提示されているものを読んで訳者が得た感想は、一つの思考の過程の必然性ということである。

すなわち、イエイツは、民主政治を「もつとも判断能力に欠ける人びとによる、もつとも支配能力に欠ける人びとの選出」と見なす地点から、ファシズムの中に「権威主義的支配」の理想、すなわち、「厳格な階級制度や、少数の人びとへの強大な権力の集中や、個人としての卓越性に基づく指導者への無条件的な服従」にもつとも近いものを見出す地点に移行し、最終的には、「政治を完全に拒絶し、どのような組織形態の現代の国家にたいしても信頼を置くことはなく」なり、「文明についての完全なペシズム」あるいは「悲劇的ストイシズム」を表明する地点に後退したのである。

もとより、ファシズムも、ペシズムも、悲劇的ストイシズムも避けられなければならないだろう。そのためには、民主主義の擁護者は、「もつとも判断能力に欠ける人びとによる、もつとも支配能力に欠ける人びとの選出」と見なされてしまうような民主主義の現状を民主主義の理念と照らし合わせ、そのような状況を自己超越していく道を探る必要があるのではなからうか。

ともあれ、ここに訳出したハリソンのイエイツ論は、けっして到達点ではなく、出発点にすぎないことは確かである。

(本学助教授)